## 5) ニゴロブナの経済的な漁獲時期の設定

井嶋重尾・孝橋賢一

【背景】ここ数年、ニゴロブナの水揚げ量に増加傾向が見られるのに伴って、ニゴロブナの漁獲操業が早くなってきている。しかし冬期に水揚げされるニゴロブナは、生殖腺が未発達であるために単価が安い。

【目的】沿湖の漁協におけるニゴロブナの出荷時単価を聞き取り調査することによってニゴロブナの単価の推移を把握し、ニゴロブナの最も単価の高い時期を求めて経済効率の高い操業時期を設定する。

【成果概要】1.ニゴロブナは、主に500～600gよりも小さなフナ寿司に手頃なサイズの雌、500～600g以上の大型サイズの雌および雄に選別される。

2.94～95年漁期は、93～94年漁期に比べて4月以降の単価があまり上昇しなかった(図1)。漁業者からの情報によると、94～95年は93～94年よりも水揚げが順調であったようで、漁獲量が増加していると思われる。また両年とも、需要が下がるからか排卵魚が混じるからか、5月には単価が下降し始めた(図1)。

3.漁期早期の単価は、93～94年と94～95年にあまり差は無かった。両年の1月の平均単価が2,720～2,904円(1,342～4,103円)であるのに対し、2月の平均単価は3,931～4,676円(2,580～6,950円)と急上昇した。漁期早期の単価の上昇は生殖腺の発達に左右されていると思われる。

4.大型の雌の単価は、漁期早期には94～95年の方が93～94年より若干低目の傾向が見られるが、3月以降はほぼ同じ単価で推移した(図2)。手頃サイズよりも需要供給関係等に左右されず、単価は安定しているようである。また、雄はニゴロブナとしての付加価値がほとんど付かないようで、他のフナ類と近似の単価で推移し、両年の差も金額としてはほとんど無かった(図3)。

5.これらのことより、今後水揚げが増加して単価のピークが変化しても、1月以前の単価はあまり変動せず低いままと推測される。したがってニゴロブナの最適漁期は生殖腺が発達し、付加価値が高い2～4月であると思われる。

【成果の活用】ニゴロブナ資源の有効利用方法として、普及指導に活用する。

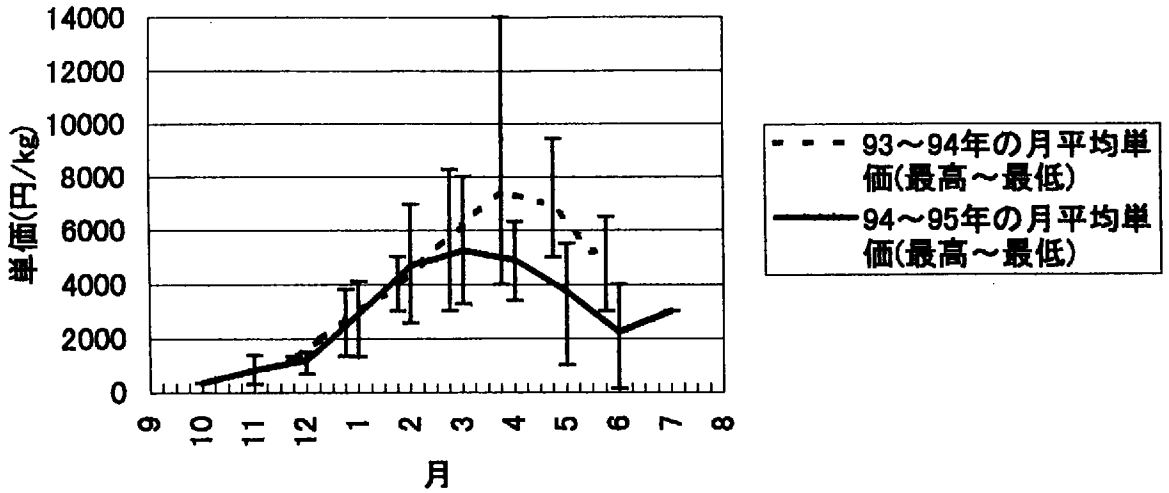


図1 93～94年および94～95年に水揚げされた手頃なサイズの雌の月平均単価

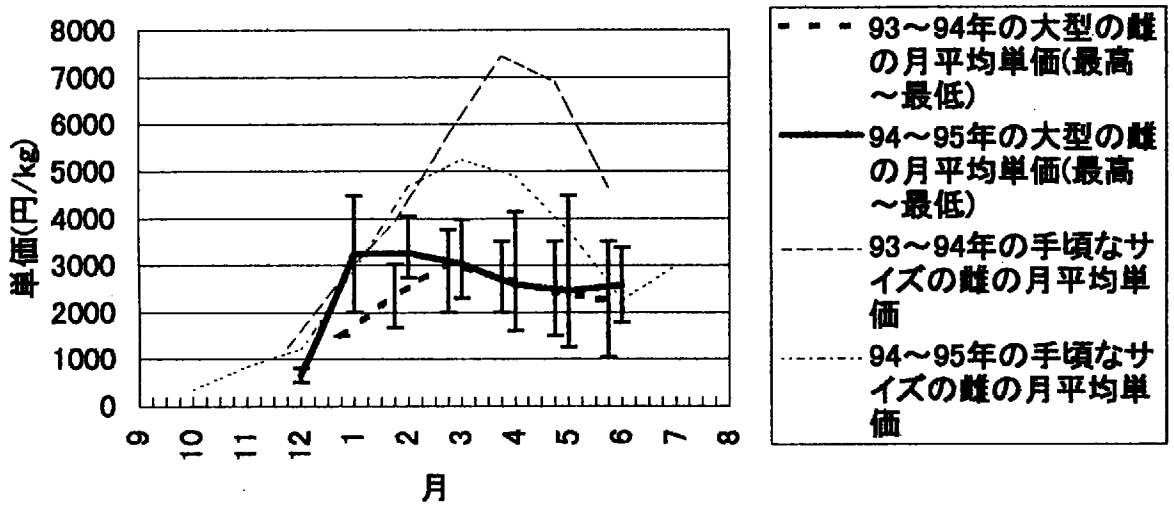


図2 93～94年および94～95年に水揚げされた大型の雌の月平均単価

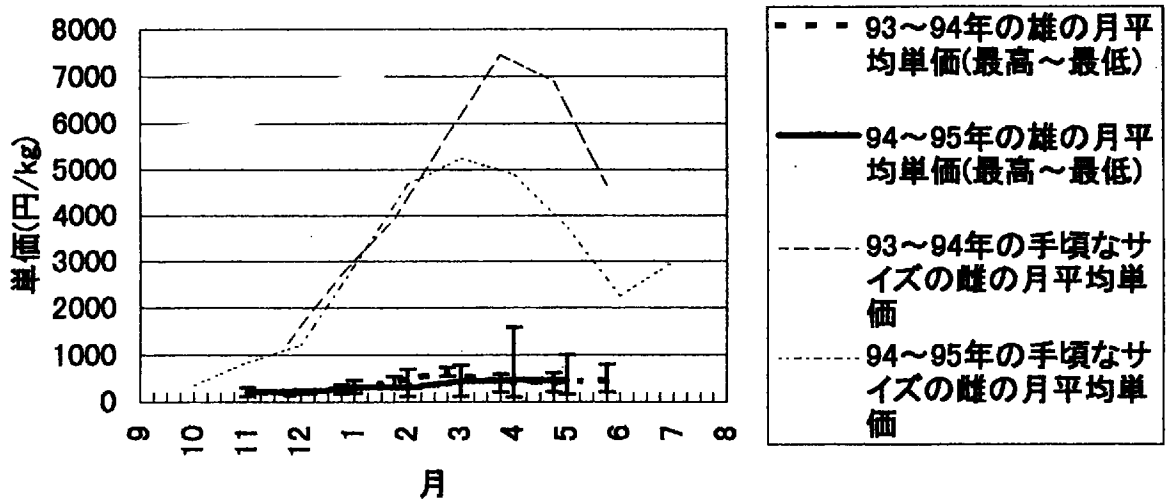


図3 93～94年および94～95年に水揚げされた雄の月平均単価の比較